

## 『羊の歌』「渋谷金王町」を読む 補足資料

立命館大学大学院文学研究科 福井優

### 『あゝ、玉杯に花うけて』(26頁、改29頁)

「嗚呼玉杯に花うけて」は、1902年に作られた第一高等学校第12回記念祭歌。作詞は矢野勘治、作曲は楠正一。歌詞は以下の通り<sup>1</sup>。

- 一 嗚呼玉杯に花うけて 緑酒に月の影やどし 治安の夢に耽りたる  
栄華の巷低く見て 向ヶ丘にそゝりたつ 五寮の健児意気高し
- 二 芙蓉の雪の精をとり 芳野の花の香を奪ひ 清き心の益良雄が  
剣と筆とをとり持ちて 一たび起たば何事か 人生の偉業成らざらん
- 三 濁れる海に漂へる 我國民を救はんと 逆巻く浪をかきわけて  
自治の大船勇ましく 尚武の風を帆にはらみ 船出せしより十二年
- 四 花咲き花はうつろひて 露おき露のひるがごと 星霜移り人は去り  
梶とる舟師は変るとも 我のる船は常へに 理想の自治に進むなり
- 五 行途を拒むものあらば 斬りて捨つるに何かある 破邪の剣を抜き持ちて  
舳に立ちて我よべば 魑魅魍魎も影ひそめ 金波銀波の海静か

また、佐藤紅緑に同名の少年小説『あゝ、玉杯に花うけて』(1928)がある。

### 斎藤茂吉(26頁、改29頁)

斎藤茂吉(1882~1953)は、歌人・精神科医。山形県南村山郡金瓶村に生れる。開成中学校を経て、1902年に旧制第一高等学校、1905年に東京帝国大学医科大学に入学。正岡子規の影響から作歌を志し、『馬酔木』の主宰者である伊藤左千夫に師事する。『馬酔木』などを通じて歌人として頭角を現し、『アララギ』が創刊されると編集を務めた。また精神科医としては、長崎医専教授となり、1921年から1924年にかけてウィーン及びミュンヘンに留学する。その後、青山脳病院の院長となった。作歌は1万7千余りにのぼり、『赤光』(1913)から『つきかげ』(1954)に至る歌集17冊のほか、『柿本人麿』(1934~40)をはじめとする評論・随筆も多い。

加藤は「日本文学史序説」において、茂吉の文学史的評価として、第一に和歌の世界の拡大、第二に歌論における「写生」の説、を挙げる。特に前者について、茂吉は和歌において「一人の人間の生活の全体、その重要な関心の対象であったすべてのものを、職場から性生活まで、包括的に和歌のなかでとりあげようとした」と同時に、「人間の性生活」にまで「知的反省」を加えた、としてその独創性を評価している。一方で、茂吉が「自然」や「詩」に対して極めて分析的であったにもかかわらず、聖戦の美名を「小児の如く」信

<sup>1</sup> 旧制高校寮歌保存会編『寮歌は生きている』旧制高校寮歌保存会、1960~69年、5頁。

じたことを加藤は問題視する。そして、その理由を「自然科学と文学の対象を扱う方法が、茂吉において、相互に関連づけられ、世界一般に対する態度として統合されたのではなかった」ことに求めている<sup>2</sup>。茂吉のこのような問題を、加藤は終生一貫して追求し、「斎藤茂吉の世界」（1993）、「鷗外・茂吉・柰太郎」（1995）、「『鷗外・茂吉・柰太郎』への短いまえがき——何故この三人か」（2010、未完）<sup>3</sup>を執筆している。

#### 正木不如丘（26頁、改29頁）

正木不如丘（1887～1962）は、医学者・小説家。長野県に生れる。本名は正木俊二。1913年に東京帝国大学医学部を卒業後、ヨーロッパ留学を経て、1922年に慶應義塾大学医学部助教授となる。医業のかたわら小説を執筆し、『三十前』（1923）、『木賊の秋』（同）などを発表したほか、同人雑誌『脈』を発行した。大正末期から探偵（推理）小説も発表した。1926年からは富士見高原療養所の初代院長に就任し、敗戦後は筆を折り、その仕事に専念した。

#### 『明星』（26頁、改29頁）

『明星』は、1900年創刊の文芸雑誌で、与謝野鉄幹主宰の東京新詩社の機関誌。与謝野晶子を中心に浪漫主義を鼓吹し、近代詩の確立に貢献した。勃興する自然主義運動の煽りを食い第一次は1908年に廃刊したが、北原白秋、石川啄木、木下柰太郎、吉井勇ら「明星派」の詩人たちがその後の日本の歌壇を主導した。

#### 辰野金吾、辰野隆（29頁、改33頁）

辰野金吾（1854～1919）は明治時代を代表する建築家。佐賀県生れ。日本銀行本店、東京駅などの設計で知られる。仏文学者・随筆家の辰野隆（1888～1964）は、その長男で東京に生れた。1916年に東京帝国大学文学部仏文科を卒業後、1921年に同大学助教授に就任し、2年間フランスに留学する。1931年に教授となり、1948年に定年を迎えるまで、同大学仏文科の発展に寄与した。辰野の功績は、仏文学の原語による紹介と研究に先鞭をつけると共に、渡辺一夫、小林秀雄、佐藤正彰、中島健蔵ら日本の仏文学研究を担う優秀な後進を育成したことにある。また、随筆家としても有名で、仏文学の翻訳研究も行った。代表作に『ボオドレエル研究序説』（1929）などがある。

#### 「一九世紀文芸思潮」（26頁、改29頁）

ナポレオン帝政とその崩壊に伴う激しい政治的変動の余波を受けたかのように、19世紀

<sup>2</sup> 加藤周一「木下柰太郎と詩人たち」『加藤周一著作集 5 日本文学史序説 下』平凡社、1980年、479～481、484～486頁。初出は1980年。

<sup>3</sup> 「鷗外・茂吉・柰太郎」及び「『鷗外・茂吉・柰太郎』への短いまえがき——何故この三人か」は、鷲巢力編『加藤周一著作集 18 近代日本の文学者の型』（平凡社、2010年）に収録。

の仏文学は、多種多様な文学の流派が生み出されたことを特徴とする。大まかな流派の変容は、ロマン主義→写実主義→自然主義→象徴主義である。また、このような「十九世紀の作家の関心は、これまでもまして、人間の探求、人間を探求する方法に向けられ、それがこれらさまざまな流派によって、異なった形で表現されていく」のである<sup>4</sup>。辰野も19世紀仏文学のこのような潮流を講じたのだろう。なお、『辰野隆選集 第一巻 仏蘭西文学考(上)』(改造社、1949年)には、17世紀から19世紀末までの辰野のフランス文学論が収録されており、その講義がどのようなものであったかをうかがい知ることができる。

#### 青山〔胤通〕(26頁、改29頁)

青山胤通(1859～1917)は、医学者(内科)。美濃苗木藩の江戸下屋敷に生れる。父・景通は平田国学を信奉しており、青山は1869年に平田篤胤の孫で国学者の平田信胤の養子となる(これによって胤通に改名)。大学東校を経て1882年に東京帝国大学医学部に入学。卒業後ドイツへ留学し、帰国後の1887年、東京帝国大学医学部教授に就任し、内科学講座を担当した。癌研究所の設立や香港でのペスト研究で知られる。

#### 「魔王」(37頁、改41頁)

「魔王(Der Erlkönig)」は、1782年にゲーテがデンマークの民間バラード『魔王の娘』を基にして書いた詩。1815年に作曲されたシューベルトのリートとしても有名。詩の内容は以下の通り<sup>5</sup>。

夜半をつらぬき 風を衝き ひたすらに駆りゆくはだれ? 駆りゆくは子をつれた父父  
はわが子をあたたく腕にいだき しかとだき 深くもかばう——

吾子よ なぜ 恐ろしげにもおもてをかくす?—— おとうさん あの魔の王が見えないの 冠つけ 裾長く曳く あの魔の王が?—— 吾子よ あれはたなびく夜霧のわざさ——

「かわいい子よ おいで わたしといっしょにゆこう! いっしょにすてきな遊びをしよう 岸のべに 花はとりどりにひらいている 母上は 金の衣装をどっさりとしまっているよ」

おとうさん おとうさんてば あれがきこえない? 魔王が こそえで あんな約束するよ—— こわがるな 吾子よ こわがるな 枯れ葉にかぜがざわめくのだよ——

「うつくしい子よ さあ いっしょにゆかないか? わたしの娘は着飾って そろっておまえをもてなすよ 娘らは夜の踊りの輪をえがき おまえをゆすり おまえとおどり 歌をうたって眠らすよ」

<sup>4</sup> 渡辺一夫・鈴木力衛『増補 フランス文学案内』岩波文庫別冊、1990年、133頁、初版は1961年。

<sup>5</sup> 生野幸吉・檜山哲彦編『ドイツ名詩選』岩波文庫、30～35頁。

おとうさん おとうさん でもあれが見えないの あの怖いくらがりには 魔王のむすめ  
がひそむのが？—— 吾子よ 吾子よ はっきりと判るじゃないか あれはうすぐらい  
年寄りの柳の影なのだよ——

「わたしはおまえが好きだ うつくしい姿が心そそるのだ いやというなら 力づくで  
もつれてゆく」—— おとうさん おとうさん 魔王がぼくをつかまえる！ 魔王はぼ  
くに 痛いことしたよ！——

父は聞くよりおぞけ立ち さらに馬をひた駈けに 両腕は くるしみあえぐ子をいだ  
き ちからつくして館やかたに着く いだかれたまま 子は息たえていた